

戯曲『誓いのヤウガンダラーヤナ』について

増田良介

I 序

カーリダーサ（4世紀?）以前に、「バーサ（Bhāsa）」なる詩人が活躍しており、『夢のヴァーサヴァダッター（Svapnavāsavadattam）（以下SV）』などいくつかの作品で名声を博していたことは、カーリダーサの戯曲『マールヴィカーとアグニミトラ（Mālavikāgnimitram）』序幕における言及¹⁾などにより知られていたが、その作品は失われたと考えられていた。そのため、今世紀初頭、T. Gaṇapati Śāstriがケーララ州でSVを含む13編の戯曲の写本を発見し、バーサの作品として出版すると世界のインド学界に熱狂的な反応が起こった²⁾。ところがやがて、これがバーサの作であり、4世紀以前の作品であるということに疑義が提出され、多くの学者が参加した大論争が繰り広げられた。これは、発見された写本に作者や年代を示す手掛かりが何もなかった上、発見者の論拠が弱いものであったり後にそれを覆す事実が出たりしたためである。この論争は結論に至らず、現存するSVがバーサの作品なのか、またいつ頃の作かは全くわかっていない。

これまで筆者はこの13編の戯曲からいくつかを取り上げ、典拠となった文献とストーリーを比較することによって、作者の制作意図を推測するという作業を行ってきた[増田良介, 1990 a, 1990 b, 1993, 1996 a, 1996 b]。本稿では、名高いSVの姉妹編にあたる4幕の戯曲『誓いのヤウガンダラーヤナ（Pratijñāyauṅandharāyaṇa）』を扱う。

II 戯曲の概要

この劇は、大説話集『ブリハットカター（大物語）（Bṛhatkathā）』（6世紀以前?）に基づいているといわれる。『ブリハットカター』そのものは現存しないが、8～11世紀にネパールやカシミールで書かれた3つの改編本によって内容を窺うことができる。インドの説話集は大きな枠物語のなかに多くの挿話が挿入される形をしばしば採るが、ウダヤナの物語は、この『大物語』の枠物語であった。この物語を題材に、古くから多くの戯曲や叙事詩が書かれている。

本論文では、戯曲に最も近い物語を含む『カターサリットサーガラ³⁾（Kathāsarit-sāgara）（『物語の河の流れこむ海』1063-1081頃、ソーマデーヴァ（Somadeva）作。以

下KSS)』を比較対象にする。しかしこれは、KSSが『誓いのヤウガンダラーヤナ』の直接の典拠であるということの意味するものではない。

この戯曲中で扱われる出来事はSV以前の、ウダヤナとヴァーサヴァダッターの結婚である。登場人物もSVと多く共通するが、興味深いことにウダヤナとヴァーサヴァダッターの二人は全く登場しない。SVの中で、この戯曲の中の出来事、特に絵姿による結婚式（KSSにはない）が詳しい説明無しに言及されていることなどから、SVよりもこちらが先に書かれたと考えられている。

第1幕：ヴァツァ国の都カウシャーンビー。ウダヤナは象狩りに出かけている。大臣ヤウガンダラーヤナは、ウッジャイニー王マハーセーナがウダヤナを捕らえようとしているという情報をつかんでおり、王に使者を出そうとしている。ところがそこへ、王の従者ハンサカが到着し、王がマハーセーナの軍に捕えられたことを報告する。森で巨象を見つけて追ったところ、それはマハーセーナの計略で、中に兵士を隠した張りぼてだったのだ。ヤウガンダラーヤナは王の救出を誓う。

第2幕：アヴァンティ国の都ウッジャイニーの王宮。王女ヴァーサヴァダッターへ結婚を申し込む使者が毎日来ているにもかかわらず、マハーセーナ王は決めかねている。王妃が入ってきて、ヴァーサヴァダッターがヴィナー（楽器）に夢中になっているので先生が欲しいという。王は「結婚すれば、夫が教えるだろう。それより相手は誰がよいだろう」という。そのとき門番が入ってきて「ヴァツァ王（ウダヤナ）が……」という。それは敵王ウダヤナの捕囚の報告であった。彼はさらに、ウダヤナが戦いで傷つき、弱っていることを告げる。王は、丁寧にもてなすよう命じる。

第3幕：乞食、狂人、仏僧が、奇妙な会話をしている。やがて彼らはアグニの寺院に入る。三人は実は、姿を変えたヤウガンダラーヤナ、大臣ルマンヴァット、道化ヴァサンタカだった。彼らは再会を喜ぶ。ヤウガンダラーヤナは二人に、マハーセーナの象を暴れさせ、その隙にウダヤナを救い出す計画を話す。しかしヴァサンタカは「無駄な努力だ」という。既にウダヤナと接触していたヴァサンタカは、ウダヤナがヴァーサヴァダッターと恋仲になってしまい、救出計画に同意しなかったことを告げる。ヤウガンダラーヤナは驚き、苦悩する。しかし、それならばとウダヤナとともにヴァーサヴァダッターも誘拐することを誓う。三人は元の姿に戻って寺院を出る。

第4幕：ウダヤナはヴァーサヴァダッターを連れて逃げたが、ヤウガンダラーヤナは捕虜となってしまった。マハーセーナの大臣バラタローハカにヤウガンダラーヤナは「自分は捕まったが誓いを果たすことが出来て満足だ」と話す。マハーセーナの使者が来て、ヤウガンダラーヤナを救し、ヴァーサヴァダッターとウダヤナの結婚を認めることを伝える。

Ⅲ KSS 該当部分の概要

この戯曲に相当する挿話は KSS II. 3. 1-6 に存在する。以下にその部分を掲げる。

ヴァツァ王ウダヤナは狩猟が好きで、得意のヴィーナーの音で象を馴らしては連れ帰っていた。さて、王は「自分に見合う妻はヴァーサヴァダッターだけだ。どうすれば彼女を得られようか。」と考えた。同じ頃、ウッジャイニーのチャンダ・マハーセーナ王は次のように考えていた。「娘につりあう夫はウダヤナだけだが、彼は敵である。どうすれば彼は我が婿となるだろうか。一つだけ方法がある。彼は、ただ一人で象を捕らえつつ森林の中を歩き回る、狩猟の悪徳をもつ王である。この弱点によって、策略で彼を捕らえよう。彼は音楽を知っているから、娘を彼の弟子にしよう。そうすれば、彼は疑いなく彼女に魅了され、我が婿となり、我が支配するものとなる。」

王はまず、「娘があなたの音楽の弟子になりたいと望んでいます。われわれへの親愛の情があるなら当地に来て娘に教えて頂きたい。」という言葉を使者に託し、ヴァツァ王に伝えた。ヴァツァ王はこの失礼な申し出を不審に思った。宰相ヤウガンダラーヤナは言った。「チャンダ・マハーセーナは、娘によって欲望を起こさせ、連れさり、従わせようと望んでいるのです。」ヴァツァ王は「私の弟子になりたいのであれば、姫君をこちらにお遣わしく下さい。」と申し送った。

チャンダ・マハーセーナ王は「娘を遣わすことはできない。策略を用いて彼を捕らえよう。」と考え、巨大な人工の象を作らせ、その中に兵士たちを隠して、ヴィンディヤ山中の森に置いた。ヴァツァ王の密偵たちがそれを見て報告すると、王はさっそく翌朝、大象を捕らえるために出発した。出発に際して占星術師たちが「王は捕縛せられるけれども、娘を獲る。」という前兆を語ったが、王は注意を払わなかった。ヴァツァ王は象を驚かさないうひとりでヴィーナーを弾きながら象に近づいた。すると急に象から兵士たちが飛び出して、王に襲いかかって捕らえた。マハーセーナは早速ウダヤナを娘ヴァーサヴァダッターの音楽の教師とした。ウダヤナは彼女を一目見て惚れ込んでしまい、二人は恋に落ちた。

一方カウシャンビーでは王が捕らえられた知らせが伝えられ、動揺が起こった。ヤウガンダラーヤナは「私はウッジャイニーに行き、王を救出する。」と語った。敵都に着くと、彼はせむしの老人に、ヴァサンタカは太鼓腹の醜い男に姿を変えた。二人は歌い踊りながら王宮までやってきた。奇妙な二人の噂はヴァーサヴァダッターにまで伝わり、彼女は二人を王宮に招き入れた。ヤウガンダラーヤナはウダヤナの姿を見つけ、目で合図をする。ウダヤナ王は口実をつけて大臣と二人きりになる。大臣は急いで王に鎖を解く呪文と、ヴァーサヴァダッターの心を得る呪文を教えた。

しばらくして再びヤウガンダラーヤナがウダヤナのもとにやってきて、「ヴァーサヴァダッターをさらって逃げることで、マハーセーナ王に復讐しましょう。象長官を買収したの

で、ヴァーサヴァダッターの象に乗って二人で逃げて下さい。」と言う。ウダヤナはヴァーサヴァダッターを説得し、ある夜、二人は逃げる。王宮は大騒ぎになり、王子パーラカが後を追う。しばらくウダヤナと戦うが、事情を推察したもうひとりの王子ゴーパーラカがやって来て止める。

翌朝、ルマンヴァット率いる全軍がヴィンディヤの森に到着し、そこまで来ていたウダヤナを迎える。そこへマハーセーナの使者が到着し、「ヴァーサヴァダッターを連れ去ってくれたのは好都合でした。なぜならあなたをわが国に連れて行ったのは、まさにこのためだったからです。」と口上を伝える。ヴァツァ王は喜び、カウシャンビーへ帰る。人々は妻を伴った王を祝福し、正式な結婚式が行われた。

IV 内容の比較

1 問題の所在

KSSと『誓いのヤウガンダラーヤナ』の両者は、起こる出来事やその順序、登場人物などがほぼ一致している。一見、『誓いのヤウガンダラーヤナ』は単にKSSを舞台化しただけの戯曲に見える。しかし、詳しく比較すると、両者の作者の視点は同じではなく、むしろ思いがけないほど異なっていることがわかる。本稿では、両者の違いを明らかにし、それぞれの表現意図を探りたい。

この物語は、二つの筋が絡み合っている点に特徴がある。第一は政治的な筋である。捕えられた王ウダヤナが大臣ヤウガンダラーヤナの尽力によって脱出するというものである。第二は恋愛の筋である。ウダヤナは運命的な出会いにより、敵国の王女ヴァーサヴァダッターを愛するようになり、ついには彼女を連れて逃げる。二つは様々な部分で互いに作用しあっているが、その関係は両作品で大きく異なる。この違いは両作品の表現意図の違いを反映している。

政治的な方の筋については、骨組みはほぼ同じである。両者とも、ウダヤナの捕囚という問題の生じた時に物語は始まり、それが解決された時点で大団円となる。従って、政治的な筋はこの物語の背骨であり、劇の詩人も大きく手を加えることはしなかった。異なるのは結婚と誘拐の関係である。マハーセーナが娘を結婚させることを望んでいるという点は、両作品に共通している。王がウダヤナ王を拉致するというのも同じである。しかし、KSSでマハーセーナはウダヤナを自分の娘と結婚させることを見越して誘拐しているのに対し、戯曲において誘拐は結婚と関係なく実行され、ウダヤナとヴァーサヴァダッターが結婚することになったのはまったくの偶然からなのである。ここではこれを検討する。

2 ウダヤナの誘拐と結婚の関係 —— 第1, 2幕

KSSで、ウダヤナの結婚というテーマは、戯曲においてよりもはるかに重要である。確

かに、戯曲に対応するこの小部分を物語として成立させているのは、ウダヤナの誘拐と解放という政治的な筋である。しかしこの物語が、ウダヤナの生涯という大きな物語の一部であることを考えると、この部分の目的は何より彼の結婚を描くことなのである。この前にあるのは、ウダヤナが父から王位を継承し、平和に統治したという記述である。したがって、次に来る大きなできごとが王妃の獲得（同盟国を増やすことをも意味する）であることは自然である。果たして、この部分の始まりでは、マハーセーナ王はウダヤナを婿として、ウダヤナはヴァーサヴァダッターを王妃として望んでいたことが語られる。つまり、KSSではウダヤナとヴァーサヴァダッターの結婚というテーマが最初から提示されているのである。だから、すべての出来事は結婚の実現される過程において起こる。そしてこのことは、作者にも読者にも前提である。

まず、マハーセーナがウダヤナを誘拐したのは、ウダヤナを娘と結婚させることで自分の味方にするためであったことがはっきり述べられている。物語が開始されてまもないころ、マハーセーナは自分の目論見をはっきり吐露する。

わが娘ヴァーサヴァダッターにふさわしい夫はこの世間にはいない。ただウダヤナという王がいるが、彼はこれまで私の敵であった。〈9〉

ではどのようにすれば彼はわが婿となり、支配下に入るだろうか。しかし一つだけ、方法がある。彼は森林の中を一人歩き回って象を捕えるのに夢中になっており狩猟の悪徳にふける王者だ。この弱点を利用し、策略を用いて彼を捕縛して連れてこよう。〈10-11〉

彼は音楽に長じているから、この娘を彼の弟子にしよう。そうすれば、彼の目は必ずや娘に魅了される。〈12〉⁴⁾

いずれにせよ、象狩りに出かけたウダヤナは、マハーセーナの計略である偽物の巨大な象にだまされて捕らえられる。そして、KSSではこの作戦はマハーセーナが娘と結婚させるという意図のもとに実行したことであることがはっきりしている。KSSでは象の中に兵士が隠れているのに対し、戯曲では近くの茂みに隠れていることになっているなどの違いはあるものの、この事件そのものは戯曲にも存在する。

さて、戯曲では二人の結婚はどのように言及されているか。

第1幕の舞台はウダヤナの王宮であるが、王自身は狩りに出かけていて不在であるため、この幕の主要な人物は、大臣のヤウガンダラーヤナである。彼は敵王マハーセーナが偽の象を使ってウダヤナ誘拐を企んでいることを知っており、サーラカにそのことを言う。しかしその直後、ウダヤナの誘拐が、王に随行していたハンサカによって報告される。しかし、マハーセーナがウダヤナを誘拐した理由については、単に敵対しているということ以外は全く触れられない。当然、結婚のこともヴァーサヴァダッターの名も全く言及されない。

第2幕はそのマハーセーナ王の宮廷である。この幕は、ウダヤナとヴァーサヴァダッターの結婚の可能性が初めて示唆されるだけでなく、二人の結婚とウダヤナ誘拐の関連を考える

上で非常に重要な幕である。結婚についての言及のされかたは微妙なものであるので、詳しく検討する。

冒頭、侍従が一人で登場し、マハーセーナ王が娘ヴァーサヴァダッターの結婚相手を決めかねていることを語り、退出する。ここではウダヤナの名は言及されない。ところが侍従と入れ代わりに登場するマハーセーナは、いきなり最初の詩節でウダヤナの名に言及する。

王：

私の馬のひずめに蹴立てられた道の埃が王冠の傾斜についたのを、王たちは召使となって運んでいる。しかし私の満足はない。美質を備え、象の知識を誇るヴァツァ王（ウダヤナ）が、私に頭を下げないならば。〈3〉

そして王は、このあと登場する門番バーダラーヤナと、娘の結婚についてしばらく会話を交わす。しかしここではウダヤナの名は一切出ない。ところが、この対話が終わってまた一人になると、直後の第6詩節の前に、王はウダヤナの名を言う。

王：ああ、カーシ王の使者派遣によって、私の思いはヴァツァ王獲得に行ったシャーランカーヤナにおもむく。なぜあのブラーフマナは今もお消息をもたらさぬのだろうか。

さて、ここまでウダヤナの名を二度口にした王は、彼のことをどのような存在として見ているのだろうか。まず、他の王たちが従っているにもかかわらず、唯一マガダに従わない手強い敵と見なしているのは間違いない。しかし、この時はまだウダヤナを娘の結婚相手としては考えていない。「ヴァツァ王獲得 (graha)」は誘拐を指しており、婿としての獲得ではない。ただ、二つの詩節とも「ヴァーサヴァダッターにふさわしい結婚相手がいない」という内容のセリフの直後に置かれているので、KSSのような物語を知っている観客又は読者が、ウダヤナは実は王の意中の婿であるという裏の意味を読み取ってしまっても不思議ではない。しかし、詩節〈3〉では、ウダヤナを敵として見ているだけであるし、後のセリフで、カーシ王の使者派遣から、ヴァツァ王拉致のために遣わした大臣のことを思い出しているのも、別にヴァツァ王を娘と結婚させるためではなく、単に「派遣」ということで連想しただけなのである。この一連の部分で、王女の結婚とウダヤナの名は、接近して併置されているだけで、関連付けられてはいないのである。

しかし、関係ないという結論を出して事足りりというわけには行かない。戯曲において、実際にはそうではないにもかかわらず、マハーセーナが娘と結婚させるためにウダヤナを誘拐したというように誤解されうる書き方がされていることは事実である。これは、作者の意図を探る上で、注意しておかねばならないことである。これは戯曲作者が意図的にしたことであろう。ウダヤナの名に言及している詩節がどちらも王一人の場であることは一つの根拠となる。もし王が、誰かとの対話の中でウダヤナの名を出した場合、ウダヤナに対して王がどのような感情を抱いているか、彼についてどう考えているかにある程度触れなければ不自然になる。しかし独白の中だけで処理すれば作者は適当なところで切り上げることができる。

さて、次に王妃が現れて、娘のことについて王と会話する。王妃は、早く結婚させたいと

いう気持ちと別れたくないという気持ちの狭間で悩む。ここでもやはりウダヤナの名は出ない。この対話の最後に王は王妃に、ではお前は誰を望んでいるのかと問う。ここで興味深い出来事が起こる。

王：

我々との同盟は、マガダ王、カーシ王、ヴァンガ王、スラーシュトラ王、ミティラー王、シューラセーナ王、これらがそれぞれの美質で私の心を動かす。このうちのどの王がお前にはふさわしい受け手なのか。〈8〉

〈入って〉

侍従：ヴァツァ王が……。

王：ヴァツァ王が？

侍従：お許してください、お許してください、マハーセーナ陛下。喜ばしい言葉を言うのに急ぎ、正しい振る舞いかたを守りませんでした。

王の問いに王妃が答える前に、偶然侍従が入って来てヴァツァ王（ウダヤナ）の名を口にするのである。侍従は別に王の問いに答えたわけではない。彼は、ヴァツァ王を捕らえるために派遣されていた大臣が任務に成功したことを、王に伝えに来たのである。ところが、早く知らせたいあまり挨拶をすることも忘れてしまった。その結果、あたかも王の問いに答えたかのような格好になったのである。ウダヤナは実際に後にヴァーサヴァダッターの結婚相手となるのであるから、ウダヤナの名こそ王の問いへの最も良い答えであったのだ。

観客にとってはこの偶然是重要な意味を持つ。大袈裟に言うと神意の顕れである。ここでウダヤナこそヴァーサヴァダッターのふさわしい結婚相手であることが、観客にははっきりわかる。これは作者から観客に向けられたメッセージである。

しかし、この偶然是登場人物たちにとっては偶然に過ぎない。彼らはこの運命的な符合に言及することなく、会話を進めていく。つまり、物語の中では、この時点でもまだウダヤナの名は王女の結婚との関連で述べられたことはないのである。

さて、ウダヤナについての王と侍従の会話が一段落すると、王妃が言葉をはさむ。

王妃：大臣がその方を連れて来たのですか。

王：そうだ。

王妃：このために誰にもヴァーサヴァダッターを与えたくないのです。

王：これは私が戦いで勝った敵だ。バーダラーヤナよ、シャーランカーヤナはどこだ。

この部分はやや難しいが、もし王妃がこの時ウダヤナを娘の結婚相手として考えていたならば、「このために」とは、ウダヤナを待つため、すなわち「娘にふさわしいのはウダヤナだけなので、他の求婚者には承諾を与えずに待っていた」と言っていることになる。ところがこのしばらく後に次のような部分がある。

王妃：この王族で多くの喜びごとを体験しましたが、私はこんなに喜びをもつマハーセーナは記憶にありません。

王：私もこんなすばらしい喜びは聞いた覚えがない。ヴァツァ王を捕えたというような。

王妃：ヴァツァ王ですって。

王：そうだ。

王妃：同盟を結ぶためにやってきた王族をたくさん聞きました。この人は人を送ったことがありません。

王：妃よ、彼はマハーセーナという名をも考慮しないのだ。どうして同盟をのぞむだろうか。

王妃：考慮しないでですって。子供か愚か者でしょうか。

王妃はここで「ヴァツァ王ですって (vaccharāo ṇaṃ)」と聞きかえしている。その後のやりとりからも、王の喜びがヴァツァ王の誘拐に成功したためであることを、王妃がこの時はまだ知らないことがわかる。とすると、王妃がこの時点でウダヤナを婿として望んでいたという事実はありえない。しかも「子供か愚か者でしょうか。」という言葉は、ウダヤナが夫の名声を見下すほどの自負を持つことを知って、王妃が怒りさえ感じていることを示している。王妃にとってウダヤナの最初の印象は決してよいものではなかったのである。

さて、「この王族で多くの喜びごとを体験しましたが、私はこんなに喜びをもつマハーセーナは記憶にありません。」というセリフの時点で王妃が知っていたのは、王が何かを喜んでいるということだけで、その原因が何かはわかっていなかった。ということは、ウダヤナ捕獲成功を報告する侍従の言葉を王妃は正確に聞いていなかったことになる。おそらく王妃は、直前の王の言葉、

王：そのように到着したのか。なんと!今日軍隊は武装を解いて、幸せに休め。今日以降、変装した使者を送られることは心配せず、王たちは安心できる。一言で言えば、今や私はマハーセーナ（その軍が偉大である者）だ。

を適当に聞いて、誰かを大臣が連れて来て、王が非常に喜んでいることだけを理解したのであろう。そうすると、「大臣がその方（王女の婿）を連れて来たのですか。」「そうだ。」「このために（そういうことがあるから）誰にもヴァーサヴァッターを与えたくないのです。」「(お前はヴァーサヴァッターの婿を連れて来たのと勘違いしているようだが、実際はこれは私が戦いで勝った敵だ。)」ということで、上の対話部分の解釈がひとまず可能になる。対話は次のように続く。

王：若いのが愚かではない。

王妃：何が彼に自負させるのですか。

王：名高い王仙の名を持ち、ヴェーダの言葉とつながりのあるバーラタの家が彼に自負させるのだ。相続の音楽の知識が彼に誇らせるのだ。若さを助けとする容姿が彼を迷わすのだ。なぜか起こった市民の彼への愛が彼に自信を持たせるのだ。

王妃：花婿の望ましい美質だわ。どんな不運によって不都合が起こったのかしら。

王：王妃よ、今、お前は違うところに驚いているのか。聞け。

乾いた森に起こって、世界全てを焼く火のような私の命令という火が、彼の国の端では消えるのだ。〈11〉

ウダヤナ的美質を語る王に、王妃は「花婿の望ましい美質だわ。」⁵⁾と感嘆し、さらには「どんな不運によって不都合が起こったのかしら。」と同情さえしはじめる。ここで初めて花婿という概念とウダヤナの名が、登場人物のセリフのレヴェルで結びつけられる。王妃の感情の変化が端的に表れているが、逆にここまで王妃がウダヤナについての詳しい情報を持っていなかったこともわかる。王の答えも重要である。王妃の同情に王は、「お前は違うところ（的外れなところ）に驚いている」と言い、ウダヤナが敵であることを強調する。王はまだ彼を敵としてしか見ていない。

しかしこの後、ウダヤナが深い傷を負っていることを聞くと王は手当を命じる。一人になると王はついにこう言う。

最初まず、彼の攻撃ゆえに敵意があった。彼が連れてこられると中立となった。戦いで弱り、危険にあり、不幸なのを聞くと、私は彼のことを考えなおさねばと思う。〈14〉

王は、傷ついた彼の様子を聞いてはじめてウダヤナに好意を感じはじめたのである。

以上から、マハーセーナと妃がウダヤナに好意をもちはじめたのは、第2幕後半、ウダヤナが連れて来られてからのことであるのがわかる。逆にこの幕の始まる時点では、王も王妃もウダヤナを娘の結婚相手としては考えるどころか、使者を派遣してこない唯一の王として敵視していた。当然、ウダヤナを拉致した理由は、王女の結婚相手としてではなく、純粋に政治的な敵対関係理由からである。

第2幕では、ヴァーサヴァダッターの結婚相手を誰にするかという話題とウダヤナ捕囚の話題が、交錯し併置されているために、KSSの物語を知っていて読むと、王が娘と結婚させるためにウダヤナを捕えようとしているかのような印象を受ける⁶⁾。しかし実際は、結婚は誘拐という状況によって偶発的に起こった出来事だったのである。明白に誘拐が娘と結婚させるためであったKSSとは、因果が逆になっているのである。

3 ヤウガンダラーヤナの苦心 —— 第3, 4幕

政治的と恋愛の関係で重要なのが、変装して行動するヤウガンダラーヤナ、ルマンヴァット、ヴァサンタカの3人が落ち合って、王の救出について討議するというユニークな設定を持つ第3幕である。この幕では、若い二人が愛しあうようになったことをヴァサンタカが他の二人に知らせる重要な場面がある。

ヴァサンタカは王と王女の出会いを説明し、王が一人で逃げることを拒否していることを告げる。

道化：黒分の第8日が終わった時に、ヴァーサヴァダッター王女が乳母とともに、未婚の娘が[姿を]見せるのは構わないということで、覆いの無い輿に[乗って]、牢屋の扉の前のヤクシニー様の堂へ、神の勤めをするために行きました。

ヤウガンダラーヤナ：それで。

道化：そして陛下はその日、中の牢屋の守り、シヴァカという王の家来の許しを得て牢の門から外へ出ました。

二人：それで。

道化：それで、[かつぐ] 男の肩を変えるためにとまっている輿の王女を存分に見たのです。

二人：それで。

道化：それでですって。今や牢獄は、愛の遊戯をするための喜びの園となりました。

ヤウガンダラーヤナ：彼女に対して主君は愛着の心を起こしたのではあるまいな。

道化：災難は集団で行動するというのはこのようなことでして。

ヤウガンダラーヤナ：友よ、ルマンヴァットよ、心をしっかりもて。我々はこの姿で老人とならねばならぬぞ。

道化：そして私は王にこういわれました。ヤウガンダラーヤナに告げよ。検討したような考えは余は気に入らない。誇りある出立の時、プラディオータ（マハーセーナ）に格別の屈辱を[与えること]を考えている。愛欲第一と私を蔑むなかれ。余は侮辱には名誉を求めぬぞ、と。

ヤウガンダラーヤナ：ああ、敵に笑われる言葉だ。ああ、悟性に恥のないこと。ああ、友を苦しめること。ふさわしからぬ所と時に主君は遊びを望むのだ。

この後ヤウガンダラーヤナは、王をヴァーサヴァダッターもろとも救い出すことを誓う。

さて、この部分は二つの点で重要である。まず、王とヴァーサヴァダッターの出会い方である。KSSではむろん、王が王女にヴィーナーを教えているうちに恋仲になったのであるが、戯曲では王が偶然彼女を見掛けたのがきっかけだったことになっている。この相違はしばしば問題になっている [Zin-Oczkowska 1990:181] [Tieken 1993:20]。この戯曲の別の個所で、ヴァーサヴァダッターがウダヤナのヴィーナーの弟子であったことは示唆されているが、ヴィーナーを教えているうちに二人が愛しあうようになったなどは全く言われていないからである。

まずは、第2幕のマハーセーナの言葉である。

王：ヴァーサヴァダッターはどこだ。

王妃：女吟遊詩人のウッターのところに、ナーラダ式のヴィーナーを習いに行っています。

王：どうして彼女にガンダルヴァ（音楽神）への興味が起こったのだ。

王妃：何かのきっかけで、カーンチャナマーラーがヴィーナーの練習をしているのを見て習いたくなったようです。

王：子供らしいな。

王妃：マハーセーナ様にもお知らせしたいことがあります。

王：なんだ。

王妃：先生が欲しいのです。

王：結婚の 때가近づいた娘に どうして今先生がいるのだ。夫が彼女に教えるだろう。

KSS の物語を知っている人がこの部分を読めば、これはウダヤナがヴァーサヴァッターにヴィーナーを教えることを示唆していると考えられるであろう。しかしこの時点で将来の「夫」がウダヤナであることを王と王妃は知らないし、ウダヤナが結婚前（夫になる前）に王女にヴィーナーを教えるとは書かれていない。

第4幕にはこのような部分がある。

バラタローハカ：ヤウガンダラーヤナよ。アグニを証人とせずマハーセーナの娘という弟子を連れて行き、与えられぬ物を奪うことをした、この強盗の行いは正しいのか、おい。

ヤウガンダラーヤナ：いやいや、あなたはそんなことをいうな。これは主君の結婚だ。

バラタの一族に生まれた、ヴァツァの力強い主君は妻の称号を与えずして教える行いはしない。〈17〉

マハーセーナの大臣バラタローハカは捕らえられたヤウガンダラーヤナに対し、ウダヤナが音楽の弟子であるヴァーサヴァッターを連れ去ったことを非難している。しかしこれに対してヤウガンダラーヤナは、王は結婚してから教えたのだと反論している。すなわち、ウダヤナは、ヴィーナーを教えているうちに結婚したのではないというのである。詭弁に聞こえるが、バラタローハカがこれに反論していないところを見ると、劇作家の考えはヤウガンダラーヤナに一致していると思われる。

ここからわかるのは、ヴィーナーの弟子と恋仲になるという行為は、この詩人の感覚では倫理的に許されないことであったということである。この倫理感は当然、登場人物であるバラタローハカやヤウガンダラーヤナも共有している。そこで詩人は「ヴィーナーを教えるうちに恋心が芽生えたのではなく、ヴィーナーを教えるまでにはすでに『結婚』していたのだ」という抜け道を考えた。そのためにはヴィーナー以外のなれそめが必要になる。それが、第3幕にあった、偶然見掛けたことによる恋という設定なのである。しかし典拠文献における恋のきっかけがヴィーナーを教えることであったことは、第2幕と第4幕での曖昧なほめかしから逆に推定できる。

第3幕でもう一つ重要なのは、王が救出計画を拒否したことを、ヤウガンダラーヤナが苦々しげに嘆くことである。

ヤウガンダラーヤナ：ああ、敵に笑われる言葉だ。ああ、悟性に恥のないこと。ああ、友を苦しめること。ふさわしからぬ所と時に主君は遊びを望むのだ。

彼は最終的には王とヴァーサヴァッターの二人ともの救出を決心するのであるが、ここでは王を罵倒せんばかりに落胆している。これは尋常ではない。KSS では、ヤウガンダラーヤナは王に会うといきなり万事承知といった風に、ヴァーサヴァッターの心を得るた

めの呪文を教えたりしており、二人の恋を嘆く様子などない。しかし、戯曲を読むと、ウダヤナは大臣の苦勞も知らず恋愛に耽る愚王であるという印象さえ受ける。

冷静に考えれば、救出計画を進めるヤウガンダラーヤナにとって、王の恋愛という事態は新たな妨害に他ならないのであるから、彼の態度も理解できる。しかし、KSS からはそのような印象を受けないのはなぜか。彼が王の救出のために尽力していることも、ウダヤナが敵地で恋に落ちたことも同じであるのだからである。

辛酸をなめるヤウガンダラーヤナに対比して、王の恋愛が場違いなものに感じられるというこの点こそが、この劇を理解するポイントである。

さて、最後の第4幕、ヤウガンダラーヤナは見事誓いを果たし、ウダヤナはヴァーサヴァダッターを連れて無事故国に向かう。しかしヤウガンダラーヤナ自身は奮戦むなしく負傷し、捕らえられる。ところが捕虜にされても彼は卑屈にならない。自分は捕まっても王を救出できたことで勝ったと考えているからである。敵の大臣バラタローハカにこれまでの行為を非難されても堂々と反論する。この中には、前述の、ヴァーサヴァダッターを連れて逃げたウダヤナの行為への非難に対する反論も含まれる。KSS にはこのような場面はない。ヤウガンダラーヤナは計画を王に伝えるだけで、救出の場面にはほとんど登場しない。

さて、後半の第3、4幕において強調されるのは、ウダヤナを救うためのヤウガンダラーヤナの苦勞である⁷⁾。KSS のヤウガンダラーヤナももちろん王を救うための努力はしているのであるが、その苦勞はほとんど描かれない。

V この戯曲の主題

ここまで、この戯曲が KSS と異なる点を列挙してきた。一見ばらばらに見えるこれらの変更であるが、いずれも単一の目的に基づいている。政治的な筋と結婚の筋を分離して、しかも結婚の筋がなるべく影が薄くなるようにするという目的である。

KSS に比べて、この戯曲では王の救出に努力するヤウガンダラーヤナの苦勞に、より光が当てられている。彼は姿を変えて努力し、ウダヤナをついに解放する。さて、KSS ではウダヤナがヴァーサヴァダッターと恋に落ちても、それは皆の望んでいたことであるし、物語の最初に予告されていたことが実現したに過ぎなかった。ところが戯曲では KSS と違って、ウダヤナもマハーセーナも誘拐の前には二人の結婚を望んでいたわけではない。王の結婚があらかじめ懸案として提示されることはなかったのである。これによって、KSS にはあった、ウダヤナの結婚という大きな文脈がなくなってしまう。しかも、戯曲ではヤウガンダラーヤナらの苦勞が強調されている。この差は大きい。

このために、ヴァーサヴァダッターと恋に落ちるというウダヤナの行動から観客の受ける印象が大きく変わる。戯曲では、周到に準備された救出計画をこれから実行しようというときに、ウダヤナがよりによって敵国の王女と恋に落ちたことが知らされる。これによって計

画は大幅な変更を迫られ、負担も大きくなる。それまでヤウガンダラーヤナに感情移入して来た観客にとって、ウダヤナは、大臣の苦労を知らない愚かな王であるような印象さえ受ける。捕虜にされた王を大臣が救出するという筋があまりにも完結しているために、恋愛のテーマは余計なものになってくる。

そもそも、ヤウガンダラーヤナの辛苦を主題にした時点で、牧歌的なKSSでは何の問題もなかったウダヤナの気楽な恋愛を受け入れる余地はこの劇にはすでになくなっていた。しかし、観客はおそらく物語をよく知っているから、恋愛の要素を排除してしまうわけにもいかない。そこで、細部の設定の手直しによってなんとか妥協できるところまでこぎつけたというのがこの戯曲だったのである。

結婚の扱い方がKSSと戯曲で異なっているのは、以上のようなコンセプト変更をより成功させるため、あるいは変更によって生じた軋轢を解消しようとする試みであったと考えると納得できるものが多い。

まず、ウダヤナ誘拐の動機である。KSSでは娘と結婚させるためであった。つまり、敵対者ではあるが、根底にあるのは同盟関係を結ぶという目的である。しかも、ヴァーサヴァダッターとの結婚を望むという点ではウダヤナも同じであり、問題はどちらから言い出すかという面子の問題ぐらいであった。このような気楽さがある限り、ヤウガンダラーヤナが救出のための苦労をどれほど語っても真実味は感じられないであろう。実際、KSSではヤウガンダラーヤナが自分の苦労を語ることはない。

一方戯曲では、マハーセーナがウダヤナを捕えたのは敵であったためであり、王女の結婚相手としてではない。これならば大臣はどんな苦労をしても王を救い出さねばならない。この設定は、ヤウガンダラーヤナの苦悩を中心モチーフにするために必要なものだったのである。ウダヤナとヴァーサヴァダッターが愛しあうようになり、駆け落ちとなったのは偶然の結果であり、誘拐とは関係ない。

主人公であるはずのウダヤナとヴァーサヴァダッターが舞台に登場しないことも理解できる。もしウダヤナが登場すれば、ヤウガンダラーヤナたちが苦難に耐えて王のために働いているのに、なぜ自分が彼らの邪魔になるような恋愛をしているのかを語らねばならない。しかし、現実に登場せず、語られるだけの存在であれば、人間的な肉付けなしに、ただ救出すべき王という記号としての存在に留まることができ、観客の倫理的非難の標的にもなりにくい。

王の恋のきっかけの変更も、倫理的正当化ということで説明がつく。詩人がどのような法典に準拠していたのかはわからないが、少なくともKSSのように、ヴィーナーを教えるうちに恋に落ちることが倫理的に良くないと考えていたことは、第4幕からわかる。逆に、第3幕で道化の語る、ヴァーサヴァダッターを偶然見掛けて恋に落ちたという設定のほうは許されると考えていたことになる。これも、王が非難の対象となることを避けるための措置と考えられる。

VI 結 語

以上のように、この劇は原典である『プリハットカター』の物語を、王の救出に尽力する大臣ヤウガンダラーヤナの苦勞に焦点を定めて戯曲化したものである。そして、原典からの変更は、ヤウガンダラーヤナの努力を描く際により緊迫感を増すため、あるいは、このコンセプト変更によって、あたかも大臣の努力を無にする愚かな王に見えてしまうウダヤナを、観客の倫理的な非難の対象にすることを避けるためになされたものであった。

〔付 記〕 本稿は平成9年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

- 1) 「観客はバーサ、サーウミッラ、カヴィプトラなど有名な詩人の詩作を看過して、現存する詩人カーリダーサの作品に注意を払うだろうか。」〈15〉
- 2) 例えば、[Pusalker 1968] の巻末には20ページに及ぶ文献目録が付けられている。
- 3) テキストは [Śāstri 1970: 32-47] を使用した。なお、[Tawney 1923] [岩本裕 1954] の二つの翻訳を参照した。
- 4) ただし、この部分の読みには少し注意が必要である。ここに書いてあることを鵜呑みにすると、マハーセーナは物語の中で起こる出来事をすべて予測していたことになるが、そんなはずはない。この予測は、王が現実に行っていることとは一致しないからである。もし王がこの時点でこれだけのことを本当に企てていたのなら、最初からウダヤナの拉致を試みればよいはずだが、実際にはまず、使者を立ててウダヤナのところに「娘の音楽教師になってくれるように」という口上を伝える。そして、ウダヤナが「弟子になりたいなら娘をこちらへ来させよ」と、到底できもしない返事をよこしたとき、マハーセーナはこうした。

チャンダ・マハーセーナ王はそれを聞いて考えた。「誇り高いウダヤナ王はきっとここには来ない。〈2〉

〔しかしまた〕 娘をあちらへ遣るべきではない。それは軽率であるからだ。だから、策略によって彼を捕えて、ここへ連れて来させよう。〉〈3〉

と考え、大臣たちと相談して、自分の〔象ナダーギリ〕に似た大きな人工の象を作らせた。〈4〉

ウダヤナが申し出を断ることを見越した上で最初から拉致を計画していたなら、あらためて考える必要はない。即座に拉致を指示すればよいだけである。しかし、この言い方は明らかにそれとは違う。マハーセーナは、とりあえず公式に王女に音楽を教えるよう要請し、それが断られてはじめて拉致を計画したのである。この記述は、マハーセーナがすべてを予測していたという前提と矛盾する。おそらく、一度正式な手順で申し出をすることは、マハーセーナの、読者にたいす

る倫理的アリバイになっているのであろう。そして、冒頭のマハーセーナの吐露は、当初はもっと大まかなもので、物語に合わせて後になんらかの変更が加えられたのであろう。

5) abhilaṣaṇīā varaguṇā II, 10²⁰.

6) 実際にそのように理解している研究書もある。例えば [Pusalker 1968:266]。

7) このような活躍はヴィンチャーカダッタの戯曲『ムドラーラークシャサ (Mudrārākṣasa)』を思い出させずにはいないが、両作品の前後関係については結論を保留しておきたい。

参考文献

WZKS: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*. Wien.

Pusalker, A. D. (1968) *Bhasa - A study* (2nd. ed.). Delhi.

Śāstri, Jagadīśalāla (ed.)(1970) *Kathasaritsagara*. Delhi, 32-47.

Tawney, C. H. (tr.)(1923) *The Ocean of Story*. Vol. I, Chapter XI-XIV, 122-189.

Tieken, Hans (1993) The So-Called Trivandrum Plays. *WZKS* 37, 5-44.

Zin-Oczkowska, Monica (1990) *Udayana-Schauspiel aus Trivandrum in der Entwicklungsgeschichte der Udayana-Erzählung*. München.

岩本 裕 (訳) (1954) 『カター・サリット・サーガラ (一)』岩波文庫, 43-95.

増田良介 (1990 a) 「Svapnavāsavadatta の解釈」, 『東海佛教』 35, 86-75.

増田良介 (1990 b) 「Svapnavāsavadatta のプロット分析」, 『西南アジア研究』 33, 69-85.

増田良介 (1993) 「戯曲『カルナバーラ』のプロット分析」, 『インド学報』 5, 1-14.

増田良介 (1996 a) 「戯曲『パンチャラートラ』と『マハーバーラタ』」, 『西南アジア研究』 44, 31-44.

増田良介 (1996 b) 「インド古典戯曲『チャールダッタ』と『土の小車』の書承関係」, 『説話・伝承学』 4, 88-101.

(日本学術振興会・京都大学大学院文学研究科)